

お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリ



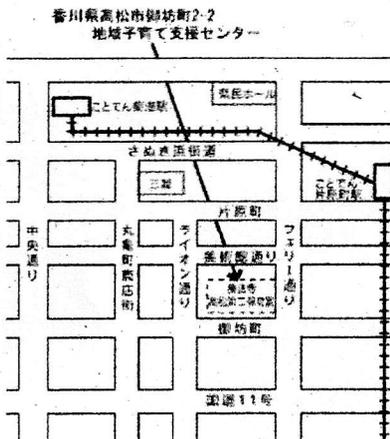
令和7年 5月 No. 366

〒760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松第二保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
https://oumanooyako.com



(厚生労働省・高松市委託事業)

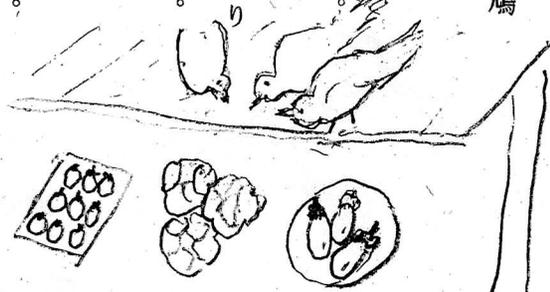
～どなたでも～			5月の主な活動	～お気軽にどうぞ～
5月	2日 23日 30日	金	ヨーガを楽しむ会 14:30～16:00	少し汗ばむ頃となりました。体をほぐして、 やわらかくしてみましょ。
5月	9日	金	花まつりパレード 14:45～16:00	白象の花御堂をみんなで引いて 表番街ドームまで行きます。
5月	10日	土	子育てに役立つ小物づくり 14:00～16:00	春がきました！お花と蝶をストローと 色画用紙でつくります。
5月	13日 20日	火	体験保育 15:00～16:00	園庭で元気よくみんなで あそびましょ。
5月	16日	金	香川みずゞさんの会 14:00～16:00	組手障子の技法2回目として、網一郎氏に ご指導いただきます。前回より大きめの作品を 作ります。申し込みは5月10日(土)まで
5月	27日	火	自然の中のあそび体験 15:30～16:00	葉や花びらを紙や布にはさんでたたき 色染めをします。
・月～金の12:00～17:00までは、園内開放しています ので、親子でご来園下さい。 (但し、土・日曜・祭日は休み)			育児相談(月～金) 12:00～17:00 しつけや子育てについての悩み、保育園生活、 入園・見学についての相談もどうぞ。	

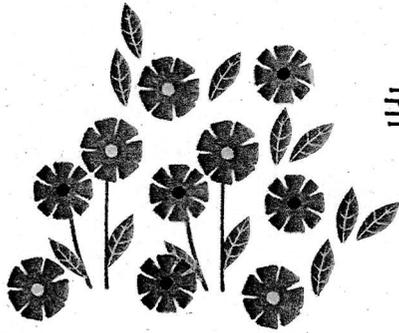


金子みずゞ童話全集①
「美しい町・上」より

ク知しな ついキ茄 ク八お親
ッライア やちャ子 ッ百鳩鳩
クぬろに やつごベは ッ屋が
とかいを やのツむは との三
鳴お鳩買はら 鳴軒羽
いしはお れもみさ いた
たてそ て。どきり た。

八百屋の鳩





幸せの鐘を鳴らそうよ

作家、NPO 法人ロージーベル理事長

大沼 えり子

一人の少年のために、一人の少年のあの笑顔を取り戻すために、私は保護司になりました。

あれは長男がまだ小学1年生の時でした。

私は嫁ぎ先の割烹料理店の切り盛りに慌ただしい毎日を送っていましたが、鍵っ子だった自分と同じ寂しさを、我が子には味わわせたくないと思い、午後には一時帰宅し、おやつをつくって迎えていました。せっかくだらなくつくるのなら、と息子の友達にも振る舞うようになり、いつしか我が家は大勢の子どたちの賑やかな遊び場となりました。私は彼らが心底愛おしく、うちに来る子はすべて自分の子のつもりで接していました。

その中に一人、他の子と遊ばずいつも私のそばから離れない少年がいました。母親が病のため愛情に飢えていたのでした。母親の温もりを知ってほしいと思い、とりわけ彼には愛情を注いでいました。

そんなある日、事件が起きました。少年が息子と一緒に遊びに行った友達の家からマスコット人形を盗ったというのです。友達の弟が大切にしていた人形だったため、母親まで巻き込んだ騒ぎになり、私のもとに相談に見えたのです。

私は日頃から子どもたちに、うちの子になるならルールを守ろうねと言い聞かせていました。嘘をつかない、人に迷惑をかけない等々、自分が親から言われてきたことばかりです。

「はい！」

と元気に答える彼らの中でも、とりわけ嬉しそうに頷いていたのがその少年でした。

それだけに、彼が人のものを盗ったとは信じられませんでした。

しかしなくなった人形を少年の家で見た、と息子が言うのです。家庭の事情で玩具も満足に買ってもらえない少年。盗ったのではなく、きっと欲しかったのだ。私はそう考え、とにかく一緒に謝ろうと言いました。

ところが彼はいくら言い聞かせても謝ろうとしません。裏切られた気持ちになった私は、もううちには二度と来ないで、と強い口調で言ってしまいました。

二週間くらいたった頃、布団を干していると、門のあたりに小さな人影がありました。チャイムを押そうとためらい、行ったり来たりしているのはあの少年でした。彼がそうして毎日うちに立ち寄っていることを息子から聞き、私は思わず駆け寄って抱きしめました。少年が「ごめんね」と繰り返しながら漏らした言葉に、私は頭をおたれたようなショックを受けました。

「あれは盗ったんじゃないで、もらったんだ……」

あの時、なぜもっと事情を聞いてあげなかったのだろう。大好きな人から謝罪を強要され、幼い少年の心はどんなに傷ついたことだろう……。

その後、少年は再び我が家に遊びに来るようになりましたが、家庭のことで心を荒ませ、いつしか顔を見せなくなりました。中学へ進学してからは、家の前を通るたびに髪の色や服装が奇抜になっていき、声をかけても返事すらこなくなりました。そしてとうとう鑑別所に送られる身となったのです。

もちろん直接の原因ではありませんが、あの時、無垢な彼の心を傷つけた後悔の念は、私の中に燻り続けていました。彼に償い^{つぐな}がしたい。もう一度彼の笑顔に会いたい—ずっとそう思い続けていたので、保護司のお話をいただいた時は二つ返事でお引き受けしたのです。

その時からたくさんの少年たちに出会ってきました。心が痛むのは、彼らのほとんどが、生まれてこの方、腹から笑ったことがないという事実です。みんな幸せが欲しくて、欲しくて、懸命に手を伸ばしているのに、どこかで歯車が狂ってしまっている。彼らは自分

のことをカスとかゴミだと言いますが、私は彼らを一条件で好きになります。

「君が大事なんだ。可愛くて、可愛くて仕方ないんだよ」

と言うと、涙をポロポロ流します。非行を犯して一時的に愉快になっても、それは真意ではなく、その後ずっと罪の意識でビクビクしながら過ごすことになる。人に感謝される行いを積み重ねてこそ、本当の幸せを手にするといつも説いています。

あの少年が保護観察になると聞いた時、私は観察官の方に頼んで彼を担当させてもらいました。嫌がっていた彼は、私は彼のために保護司になったと告げると、驚きの表情を浮かべました。

「もう一度君の笑顔が見たいんだよ。一緒に幸せを探そう」

彼は声を上げて泣きました。

いまは寿司職人として独立を目指して頑張っています。ようやく軍艦が握れるようになった頃、彼は私をお店に招待してくれました。カウンター越しに彼の笑顔を見た瞬間、私は思わず胸がいっぱいになりました。目頭を押さえながら食べた彼のお寿司は、世界一の味がしました。

かかわった少年たちのことは、片時も頭から離れません。観察期間が過ぎても慕ってくる彼らから、私は与えた以上の喜びを与えられ、抱えきれないくらいの心の財産をいただいています。

その後、家族がなかったり、家族崩壊の中、帰る家もなく希望を失った少年を「お帰り」と迎えてあげる家をつくりたいと考え、私は立ち直り支援の「少年の家」「ロージーベル」を立ち上げました。平成二十三年にNPO法人に認定。現在少年たちが日々笑いの中、生活をともにしています。

人は誰でも心の中に幸せの鐘を持っています。一人がその鐘を鳴らすと、周りの鐘も共鳴して幸せ色に変わっていくのです。その鐘の音が共鳴し合い周りをどんどん幸せ色に変えてゆけるよう、今日も私は少年たちに、一緒に幸せの鐘を鳴らそうよ、と呼びかけ続けています。そう、人は幸せになるために生まれてきたのですから。

